# 農民日記史料論

## ―「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」研究序説―

高木俊輔

### 一　はじめに

日記史料は、その筆記者・記録者の側から公日記と私日記とに分けることができる。近世以前の日記の多くは、政務あるいは職務に関する勤務日記であり、公の勤務に関わる事実を記録した日次記、日誌・日録などがそれである。私日記は平安時代から見られ、その多くは朝廷に奉仕する公家関係の日記であった、といわれる。(1)

近世になると、日記史料は多様な形で残されている。まず、朝廷関係では皇室の日記や公家の日記、春日社・北野社など社寺の日記、幕府では公式記録として右筆が作成した「御日記」、老中や奉行など幕府の要職にある者の記録も多くは日記形式をとって書かれ、諸藩においても大名から家臣にいたる公日記が多い。例えば、信濃国松代藩に見ると、公日記は五十種類をこえていたのである。

「家老日記・学校日記・武芸掛日記・表御用人日記・御目付日記・郡奉行日記・御勘定所元〆日記・御勝手方日記・御元方日記・御余慶方日記・籾方掛日記・御金掛日記・御宮見廻役日記・寺社方日記・足軽奉行割番日記・水道御役所日記・御武具方日記・表御納戸日記・御徒士頭日記・木戸掛日記・執政日記・公用方日記・松

代藩庁日記・軍事方日記・監察方日記・租税方日記・計政局日記・会計方日記・計監方日記・支配監使日誌・郡政局日記・郡政民事庶務方日記・職事係日記・御側御納戸日記・御部屋御側御納戸日記・御祐筆間日記・御側預り日記・貞松院様御側日記・御次日記・近習日記・御部屋番日記・御膳番御刀番日記・御守役日記・御奥支配日記・御奥元〆日記・御奥御手本日記・真晴院奥日記・御料理所日記・御家日記・老中日記下調、等々」[2]

また、近世には、学者・文人の日記、町人や農民の日記、女性の記した日記など、私日記も多く記録され保存されてきている。本稿の扱う日記は農民日記と表記したが、私的な日記を代表させる意味で表現したつもりであり、庶民の日記と言い換えうる程度の意味で使っていくつもりである。その庶民日記は、とくに最近いろいろな形で活字化されており、広くその存在が知られるようになってきている。しかし、県史や市町村史誌や単行本にまで及ぶ刊行の現実を把握する余裕がないので、ここでは幕末から維新期にかぎり、刊行された日記史料の位置・概要を見ることによって、現時点における庶民日記の研究状況の一端にふれておきたい。

まず、『日本史籍協会叢書』に所収されている日記についてみておこう。[3]これは、大正期に刊行されたのだが、一九六〇年代から『野史台維新史料叢書』などを加えて、東京大学出版会が復刊しているので、増補分も含めて検討していこう。

第1表に示したように、公卿関係の日記は一〇点所収されている。幕末・維新期関係で刊行されてきた日記には、公卿の家の記録といっ

第1表　公卿関係

| | |
|---|---|
| 朝彦親王日記 | (元治1・1864－慶応3・1867) |
| 一条忠香日記 | (安政1・1854－文久3・1863) |
| 押小路甫子日記 | (安政6・1859－明治1・1868) |
| 勧修寺経理日記 | (嘉永5・1852－安政6・1859) |
| 嵯峨実愛日記 | (元治1・1864－明治1・1868) |
| 中山績子日記 | (安政3・1856－明治7・1874) |
| 中山忠能日記 | (安政6・1859－明治1・1868) |
| 万里小路日記 | (弘化2・1845－慶応3・1867) |
| 岩倉具視日記 | (文久2・1862－明治4・1871) |
| 正親町公薫旅日記 | (文久3・1863) |

(『日本史籍協会叢書』所収分)

第2表　政治家関係

| | |
|---|---|
| 安達清風日記 | (安政1・1854－明治1・1868) |
| 大久保利通日記 | (安政6・1859－明治10・1877) |
| 尾崎忠征日記 | (慶応2・1866－明治1・1868) |
| 木戸孝允日記 | (明治1・1868－明治10・1877) |
| 伊達宗城在京日記 | (文久2・1862－明治1・1868) |
| 広沢真臣日記 | (文久3・1863－明治1・1868) |
| 渋沢栄一滞仏日記 | (慶応3・1867－明治1・1868) |
| 中根雪江丁卯日記 | (慶応3・1867) |

(『日本史籍協会叢書』所収分)

た色彩のつよいものが多い。また、政治家の日記関係（第2表）は八点を数える。その内容はどれもが安政期から明治十年までの時期のものである。うち二点（尾崎忠征日記と渋沢栄一滞仏日記）は旅日記である。政治家関係と分類した日記の筆記者は、大名・藩主といった支配の頂点にあったものではないので、ひろくいえば次の志士関係に入れても差し支えないものである。

さて、『日本史籍協会叢書』所収本には志士関係の日記が多い。それに『野史台維新史料叢書』も加えてまとめたものが第3表である。地域的にまとめて示したから、西南雄藩の藩士出身の志士が圧倒的に多い事がわかるであろう。西南雄藩以外では、水戸藩の関鉄之介・酒井彦八郎、松代藩の佐久間象山、桑名藩の酒井孫八郎、大和の伴林光平の五人にとどまる。なお、表に示した二五人のうち藩士以外の出身者は、大和の伴林光平、長門の白石正一郎、土佐の中岡慎太郎、筑後の真木直人の四人だけである。これらの日記・日録は、活動日記といえるものであるから、明治維新への動きを具体的に解明する上で、ずいぶん役立ってきている。ここに挙げたものに志士個人の伝記や全集などに所収された日記類を加えると、かなりな数になる。

以上で見てきた日本史籍協会関係は、大正期から昭和にかけての刊行物で、倒幕を目指した西南雄藩側の日記が多いことは明らかであるが、一方最近の日記史料の刊行状態を見ると、庶民の日記関係が多くなっている。その一端を知るために、佐藤誠朗が『幕末維新の民衆世界』（岩波書店、一九九四）を書くにあたって引用・利用した文献を示

## 第3表　志士関係

| | 日記名 | 筆記者 | 出身 | 記述年限・同西暦 | 出典 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 関鉄之介日録 | 関鉄之介 | 水戸藩 | 安政5－文久元・1858－1861 | 野史台 |
| 2 | 酒泉直滞京日記 | 酒泉彦八郎 | 水戸藩 | 文久3－慶応3・1863－1867 | 日乗3 |
| 3 | 公務日記 | 佐久間象山 | 松代藩 | 元治元・1864 | 野史台 |
| 4 | 酒井日記 | 酒井孫八郎 | 桑名藩 | 明治元－明治2・1868－1869 | 日乗4 |
| 5 | 南山踏雲録 | 伴林光平 | 大和 | 文久3・1863 | 日乗3 |
| 6 | 江月斎日乗 | 久坂玄瑞 | 長州藩 | 安政6－元治元・1859－1864 | 日乗1 |
| 7 | 品川弥二郎日記 | 品川弥二郎 | 長州藩 | 慶応2－慶応3・1866－1867 | 日乗2 |
| 8 | 遊肥日録 | 土屋矢之介 | 長州藩 | 文久2・1862 | 野史台 |
| 9 | 白石正一郎日記 | 白石正一郎 | 長門 | 安政5－明治11・1858－1878 | 日乗1 |
| 10 | 海西雑記・行行筆記 | 中岡慎太郎 | 土佐 | 元治元－慶応3・1864－1867 | 雑纂5 |
| 11 | 伊藤和義日記 | 伊藤和義 | 高知藩 | 文久3－元治元・1863－1864 | 日乗4 |
| 12 | 再遊筆記 | 千屋　栄 | 高知藩 | 文久2－文久3・1862－1863 | 日乗1 |
| 13 | 寺村左膳日記 | 寺村左膳 | 高知藩 | 慶応3・1867 | 日乗3 |
| 14 | 七生日録 | 南部甕男 | 高知藩 | 元治元・1864 | 日乗1 |
| 15 | 遣倦録（愚庵筆記） | 樋口真吉 | 高知藩 | 文久元－慶応3・1861－1867 | 日乗1 |
| 16 | 隈山春秋・帰南日記 | 平井収二郎 | 高知藩 | 文久2－文久3・1862－1863 | 雑纂5 |
| 17 | 損庵漫録 | 加藤常吉 | 久留米藩 | 文久3・1863 | 日乗2 |
| 18 | 秦林親日記 | 秦　林親 | 久留米藩 | 明治元・1868 | 日乗3 |
| 19 | 大和戦争日記 | 半田門吉 | 久留米藩 | 文久3・1863 | 日乗3 |
| 20 | 水野丹後手記 | 水野丹後 | 久留米藩 | 元治元－慶応2・1864－1866 | 日乗2 |
| 21 | 真木直人日記 | 真木直人 | 筑後 | 元治元－明治2・1864－1869 | 日乗2 |
| 22 | 宮部鼎蔵手記 | 宮部鼎蔵 | 肥後藩 | 文久3－元治元・1863－1864 | 日乗2 |
| 23 | 都日記 | 有馬新七 | 薩摩藩 | 安政5・1858 | 日乗2 |
| 24 | 紹述編年 | 伊知地貞馨 | 薩摩藩 | 安政5－慶応元・1858－1865 | 雑纂4 |
| 25 | 渓間日乗 | 美玉三平 | 薩摩藩 | 文久3・1863 | 日乗3 |

＊出典欄の略記は、「日乗」が「維新日乗纂輯」、「雑纂」が「史籍雑纂」、「野史台」が「野史台維新史料叢書」を示す。

して検討してみることにしよう。

佐藤は、幕末・維新当時の民衆がどのように時勢を受けとめていたのかを、具体的に明らかにしようとし、「庶民日記に歴史を読む」ことを意欲的に試みたのであった。佐藤が主として参照した日記史料を、先に示した志士関係の日記リストと同じように、北の地方から並べて整理して示すと、第4表のようになる。ここには、幕末・維新期における史的研究に十分応えるだけの内容を備えた、庶民の手になる日記の主たるものがリストアップされているとみてよいであろう。

日記の筆記者の出身地をみると、やや武蔵国あるいは江戸に偏りがみられるが、それだけに江戸とその周辺地の幕末の激動が、人々に筆を執らせたともいえるだろう。階層からみると、豪農としての村役人・地主、町役人、医者、僧侶、商人といったいろいろな階層のものが、日記の書き手となっていたことがわかる。また、この表中6、7、の二つの未刊分をのぞき、ここ一〇年くらいの刊行状況をみると、日記史料の活字化がすすんだことが分かる。ここでは、日記それぞれの記述内容にまで立ち入ることはしないが、村役人や町役人であっても、役職上やむを得ず日記を付けたというより、動きつつある世の中の動きをまず記録し、どのように対処しようとしたか、結果はどうなったのかの事実過程を書いている。まだ、ペリー来航のこと、横浜開港のこと、生麦事件のこと、等々特別の事件を発生した順に書き留めるといった傾向がつよいのであるが、自分のために、また家族の教訓のために、という動機もみることができる。

佐藤は、以上にあげた日記史料をはじめとして、他にいくつかの日記を加え、幕末・維新の歴史の流れを、庶民がどのように記し描いていたかを解明すべき課題としたが、著書『幕末維新の民衆世界』はまだ事件史中心の傾向を免れていないように思われる。庶民日記には、政治的事件やお触れなど支配に関する記事が少なくないが、地震・彗星、

| 現所蔵者 | 出　　典 |
|---|---|
| 藤田　稔 | 南憲一「陰陽記抄」①－⑫（『かみくひむし』39～51号）1980～83 |
| 田中近太郎 | 大村進ら編『田中千弥日記』埼玉新聞出版局　1977 |
| 市川広久 | 『日本庶民生活史料集成』12　三一書房　1971,（『青梅市史史料集』10　1969） |
| 横浜開港資料館 | 横浜市文化財研究調査会『関口日記』全26巻　1971～85 |
| 東京大学史料編纂所 | 森銑三『斎藤月岑日記鈔』汲古書院　1983，西山松之助「斎藤月岑日記抄録」『史学研究』昭和43年度 |
| 東京大学史料編纂所 | （未刊） |
| 東京大学史料編纂所 | （未刊） |
| 東京都公文書館（写本） | 鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料・藤岡屋日記』全15巻　三一書房　1987～95 |
| 東京大学史料編纂所 | 水戸市役所『水戸市史』中巻（五）1990 |
| 岐阜大学教育学部郷土博物館 | 岐阜大学教育学部『下佐波村青木久兵衛日記（抄）』1・2　1980～81 |
| 京都大学・東京大学史料編纂所 | 佐藤誠朗『近江商人・幕末維新見聞録』三省堂　1990 |
| 錦織良夫 | 原田伴彦ほか編『日本都市生活史料集成』7　学習研究社　1976 |
| 錦織良夫 | 原田伴彦ほか編『日本都市生活史料集成』7　学習研究社　1976 |
| 京都市小石秀夫究理堂文庫 | 原田伴彦ほか編『日本都市生活史料集成』7　学習研究社　1976 |
| 正行院 | 京都市『京都の歴史7　激動の維新』学芸書林　1974 |
| 古谷省三 | 『幕末の地下医古谷道庵日乗抜粋』豊浦町中央公民館　1987 |
| 藤井鼎 | 『日本庶民生活史料集成』2　三一書房　1969 |
| 佐賀県立図書館 | 佐藤常雄ほか編『日本農書全集』11　農文協　1979 |

（※佐藤誠朗『幕末維新の民衆世界』岩波新書　1994より作成）

## 第4表　幕末維新の庶民日記

| NO | 日記名 | 出身地 | 階層 | 記録主 | 記述年限 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陰陽記 | 越後国蒲原郡北五百川村 | 豪農 | 藤田嘉源治他 | 天保3－明治13・1832－1880 |
| 2 | 田中千弥日記 | 武蔵国秩父郡下吉田村 | 神主 | 田中千弥 | 嘉永3－明治31・1850－1898 |
| 3 | 市川家日記 | 武蔵国多摩郡南小曽木村 | 山守 | 市川庄右衛門 | 安政6－明治30・1859－1897 |
| 4 | 関口日記 | 武蔵国橘樹郡生麦村 | 豪農 | 関口当主五代 | 宝暦12－明治34・1762－1901 |
| 5 | 斉藤月岑日記 | 武蔵国　江戸神田 | 名主 | 斉藤市左衛門 | 文政13－明治8・1830－1875 |
| 6 | 珍聞事記 | 武蔵国　江戸本両替 | 商人 | 伊達浅之助 | 文久3－慶応2・1863－1866 |
| 7 | 反正紀略 | 武蔵国　江戸黒門 | 月行事 | 塚谷佐兵衛 | 文久3－慶応3・1863－1867 |
| 8 | 藤岡屋日記 | 武蔵国　江戸外神田 | 古本屋 | 須藤由蔵 | 文化元－明治元・1804－1868 |
| 9 | 大高氏記録 | 常陸国　水戸馬口労町 | 呉服商 | 大高織右衛門 | 嘉永5－明治元・1852－1868 |
| 10 | 青木久兵衛日記 | 美濃国厚見郡下佐波村 | 庄屋 | 青木久兵衛 | 慶応3－明治30・1867－1897 |
| 11 | 見聞日録 | 近江国神崎郡位田村 | 商人 | 小杉元蔵 | 安政5－明治30・1858－1897 |
| 12 | 歳番日記 | 近江国滋賀郡本堅田村 | 貸船屋 | 錦織五兵衛 | 文久元－明治5・1861－1872 |
| 13 | 東武日記 | 近江国滋賀郡本堅田村 | 貸船屋 | 錦織五兵衛 | 慶応元　・1865 |
| 14 | 東帰日記 | 山城国　京都 | 蘭方医 | 小石中蔵 | 慶応元　・1865 |
| 15 | 要助日記 | 山城国葛野郡東塩小路村 | 頭百姓 | 若山要助 | 嘉永3－明治2・1850－1869 |
| 16 | 日乗 | 長門国豊浦郡宇賀本郷村 | 地下医 | 古谷道庵 | 天保7－明治11・1836－1878 |
| 17 | 藤井此蔵一生記 | 伊予国越智郡井ノ口村 | 宮大工 | 藤井此蔵 | 安政4－明治9・1857－1876 |
| 18 | 野口家日記 | 肥前国神崎郡渡瀬村 | 農民 | 野口広助 | 弘化4－慶応元・1847－1865 |

火事・大雨・水害といった自然のこと、商売や商品、家の経営、職人・奉公人のこと、村内の日常生活に関して起きた年中行事・興行・祭事、講事・角力・御日待・参詣のこと、喧嘩・口論、不義・密通、一揆・騒動・出入、賊・盗難、など村の出来事、農作業や冠婚葬祭や病気・医者のことなど、多様なことがらが記されている。

本稿が課題としていることは、庶民日記その中でも農民日記を素材として、そこに記されている村落生活の諸相を取り上げ、それをまとめ上げる一例を示すことにある。ただ、庶民日記―農民日記のすべてがこうした課題設定に応える中身を持っているとはかぎらない。そこで、村方文書にみられる日記史料の諸形態を取り上げ、本稿が検討対象とする日記史料の性格・条件について、もう少し限定付けをしておきたい。

村方文書の中には、表紙に「〇〇日記」と書かれたものが少なくない。一例であるが、信濃国筑摩郡古見村（現在長野県東筑摩郡朝日村大字古見）の近世文書は、庄屋を勤めたことのある家に伝えられる形で比較的よく伝存してきている。[4] 日記という名称のついた史料も多いが、その大部分が実質的に金銭出入帳か大福帳なのである。「歳内出入日記帳」・「大福日記覚帳」・「大福日記帳」・「年内出入日記控帳」・「当座出入日記帳」・「当座日記帳」・「大福日記帳」・「万日記帳」などが目につく。「歳内出入日記帳」は天保一四年（一八四三）から四冊残されている。これは出費明細を書き込んだもので、加えて本藩のある高遠行きや伊勢参宮の記事、質物取揚や小作籾収納などを記すが、明治前半期になると内容そのものを示す「金銭出入帳」・「大福帳」という名称になる。「大福日記覚帳」は、文化八年（一八一一）から明治二年（一八六九）までほぼ毎年残されているが、その記載内容は田年貢・畑年貢（ともに籾納）、金銭の貸付（利貸し）、薪・白大豆・籾などの現物貸し、預り金、日雇賃、無尽掛金など、経営一般にわたり、「大福帳」と同じものである。

「年内出入日記帳」・「当座出入日記帳」は、文政一二年（一八二九）から明治四年（一八七一）までの間、二、

三年を欠くのみでよく残っているが、これも「金銭出入帳」と同じ内容で経営帳簿にあたる。天保期の主たる項目は、

金銭出方（支払方）、請取方、払方、田方預分、金銭預方、金銭入方、小作年貢下り、耕作取ケ附（御年貢）、穀物挽方、車屋仕送、種物入方、薬種屋、田畑手作分、穀荷物、日雇、

などがある。別の家になるが、「当座出入日記帳」・「大福日記帳」の項目を幕末期にみると、

諸入用、節季市買物、御年貢諸懸り、無尽掛、諸色取方、蚕仕入諸雑用、貸付出入、御払米、御仕送り出金、御用伝馬、穀物売買、奉公人、諸職人、日傭人、炭山出、炭売揚、畑方種図り、苗代田植、御年貢田畑預方、畑小作預、手作分、石垣諸入用、諸勘定差引、桑、酒屋、穀屋、無尽勘定記、

などがある。なお、「万日記帳」は、天保六年（一八三五）と同十年の二冊で、内容は、金銭出入りに関するメモであり、その後半部分に普請仕入覚、秋作取分、俵わけ方之覚、などを含んでいる。

以上で、村落にあって日記と名のつく帳面の大部分は、金銭出入帳かそれに近い内容のものであることが了解されるであろう。古見村では、いわゆる日記・日々の雑記帳はほとんどない。「公私用日記」・「公私要用日記」が二・三あって、ここには若干私的内容が記されている。古見村の例のように、村内の諸状況を文章化して残したり、家に関わる私的部分について多くを記すような日記史料は、伝存していない場合の方が多い。しかしながら、最近は市町村史誌類や個人の全集・単行本などの刊行に、日記史料が含まれるようになった。筆者は、ほぼ十年前に、村落情勢や民衆の生活史研究の素材になると思われる日記史料をリストアップしたことがある。[5] それから現在までの間にも多くの出版がなされている。活字化された日記史料の活用によって、日記研究の発展が期待できる時点に立ち至っているとみてよいであろう。

ところで、筆者は改めて日記史料の研究の検討を始めたところ、かねてより原本を見る機会を熱望していた「年内

諸事日記帳」（通称「大黒屋日記」）のコピーを見る機会に恵まれた。これは、周知のように、小説家島崎藤村がこの日記から厖大なメモを作り、それに「大黒屋日記抄」と名付け、やがて長編小説『夜明け前』へと実を結んでいくのである。「大黒屋日記抄」は、『藤村全集』に所収されたので容易に研究できるようになっていたが、[6]「大黒屋日記抄」から推定して、「年内諸事日記帳」そのものが村落生活に関するきわめて良質な情報を提供するものと思われたのである。しかしながら、「年内諸事日記帳」は長い間公開されてこなかったため、直接に原本を解読できる日を待っていたのであった。そしてここ数年、ようやくにしてコピーの形で原日記に接することができるようになった。そこで今回は手始めに、「年内諸事日記帳」（通称「大黒屋日記」）と島崎藤村との関わりについて考察しておくこととして、日記の内容についての分析は別稿にゆずることにしたい。

註

（1）日記に関する辞典的な説明を見ておくならば、一般に「日にしるす。其の日其の日の出来事を記す。又、其の書きもの。又、其の帳面。日誌。日乗。日暦。日録」（諸橋轍次『大漢和辞典』）、あるいは「日々の出来事や感情などの記録」（『広辞苑』）などと説明されている。日々事実を書き記したものを指すという意味では、六国史以下の史書や紀行、随筆などの文学作品までが日記と呼ばれたり、日記と名づけていたりするものもある。しかし、日本の日記の主流は、日々の事件や行動を備忘のために記録した日次記で、典籍や文書と区別して記録と呼ばれる。その日本における最古の例は、『正倉院文書』中の天平一八年（七四六）の具注暦であり、記録としての日記は平安時代から多くなる。平安時代の日記は、書き手の立場から公日記と私日記に分けられ、公日記は平安末までにほとんど姿を消すが、その後、鎌倉時代以後は、幕府や社寺などに職務日記が現われ、朝廷にも女房日記や、番衆所日記や議奏日記、また各宮家や公家の家司日記、武家諸藩の日記など、多様な公的職務日記が記録され残されてきている。一方私日記は、前出具注暦に書き込まれた記文を最初とし、天皇・皇族、公卿以下の官人、武家・僧侶・神官・学者文人にいたるまで、各階層の人々によって書かれたが、私日記の中心は朝廷に奉仕する廷臣らの公家日記であった。この公家日記は、その後多くの人々に書写され写本としても伝えられた（以上、平

凡社『日本史大事典』および吉川弘文館『国史大辞典』を参照)。

(2) 国文学研究資料館史料館『史料館所蔵史料目録』第二八号、一九七八

(3)『日本史籍協会叢書』は、大正四年(一九一五)から昭和一〇年(一九三五)までの間に一八九冊が刊行された。昭和四〇年代に東京大学出版会が復刊したが、分冊したものもあり一九二冊となった。また、昭和五〇年代には『続日本史籍協会叢書』が出版され、一〇〇冊が加えられた。

(4) 長野県東筑摩郡朝日村『朝日村史史料目録』

(5) 拙稿「幕末・明治期における豪農および知識人の日記史料について」(信州大学人文学部『人文科学論集』第二一号、一九八七)

(6)『藤村全集』第一五巻、筑摩書房 一九六八

## 二 島崎藤村の「大黒屋日記抄」について

「木曽路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。」

これは、周知のように島崎藤村の長編小説『夜明け前』の書き出しである。この『夜明け前』の「序の章一」の最後は、次のように書かれている。

「本陣の当主吉左衛門と、年寄役の金兵衛とはこの村に生まれた。吉左衛門は青山の家をつぎ、金兵衛は、小竹の家をついだ。この人たちが宿役人として、駅路一切の世話に慣れたころは、二人ともすでに五十の坂を越していた。吉左衛門は五十五歳、金兵衛の方は五十七歳にもなった。これは当時としてはめずらしいことでもない。吉左衛門の父にあたる先代の半六などは六十六歳まで宿役人を勤めた。それから家督を譲って、ようや

く隠居したくらいの人だ。吉左衛門にはすでに半蔵という跡継ぎがある。しかし家督を譲って隠居しようなぞとは考えていない。福島の役所からでもその沙汰があって、いよいよ引退の時期が来るまでは、まだまだ勤められるだけ勤めようとしている。金兵衛とても、この人に負けてはいなかった。」(7)

ここに書かれているように本陣青山吉左衛門と出てくる人物は、『夜明け前』の主人公青山半蔵の父であり、ともに作者島崎藤村の祖父島崎吉左衛門・重韶、父島崎正樹・重寛にあたる。さて、本陣吉左衛門とともに宿役人として木曽一一宿の一つ馬籠宿の運営にあたった伏見屋小竹金兵衛こそが、本名大脇兵右衛門・信興で、屋号を大黒屋といい、のちに島崎藤村が抄記することになった「大黒屋日記」を書き続けた人である。

大黒屋は、馬籠宿年寄役大脇家の屋号であるが、代々家業の酒造りと金融業で発展し、木曽福島の支配代官山村家や尾張名古屋藩への御用金や献金に応じ、すでに天明六（一七八六）年には「苗字帯刀」御免の権利を取得するなどし、幕末期にはその木曽谷における台頭ぶりは明らかであったという。(8)『夜明け前』の伏見屋金兵衛こと大黒屋大脇信興は、寛政九（一七九七）年に生まれ明治三（一八七〇）年まで生きて、生涯にわたり日記をつけた。その日記の題名は「年内諸事日記帳」と名付けられているが、一般には、屋号をとって「大黒屋日記」といわれてきた。

「大黒屋日記」は、文政九（一八二六）年から死ぬまで書き続けられた大脇信興の私的日記といえるもので、年寄役としての役務に関する公的日記ではない。のちに、島崎藤村がこの日記の存在を知り、大量のメモ―「抄記」（書き抜き）をとり、それをベースにおいて長編小説『夜明け前』を書いたのである。ここでは、島崎藤村がどのようにして「大黒屋日記」と出会い、いつ頃「抄記」したか、などの点にかぎって整理しておきたい。いずれ「大黒屋日記」そのものの内容を検討する前段階の作業として、しばらくは藤村と「大黒屋日記」との出会いの時点に立ち戻ってみよう。

◇　◇

大脇兵右衛門信興のつけた「年内諸事日記帳」（以下とくに原題名を必要としないかぎり「大黒屋日記」と表記する）が『夜明け前』と緊密に関わるものであることは、島崎藤村本人が、すでに『中央公論』の昭和一一（一九三六）年の一月号・二月号に、完結した『夜明け前』についての「覚書」として書いた文章（同氏『桃の雫』所収）の中でふれている。

「昭和二年のはじめには、わたしはすでに『夜明け前』の腹案を建てていはゐたが、まだ街道といふものを通して父の時代に突き入る十分な勇気が持てなかった。といふのは、わたしの祖父や父が長い街道生活の間に書き残したものもいろいろあったらしいのであるが、日清戦争前の村の大火に父の蔵書は焼けて、参考となる旧い記録とても吾家にはさう多く残ってゐないからであった。これなら安心して筆が執れるといふ気をわたしに起こさせたのも大黒屋日記であった。その年にわたしは一夏かかって大脇の隠居が残した日記の摘要をつくり、それから長い仕事の支度に取りかかった。」(9)

島崎藤村自らがいうように、『夜明け前』の作品が書かれるために「大黒屋日記」の果たした役割は大きかったのである。そして、それは「大黒屋日記抄」が作られたことによって可能になったのであった。事実、藤村が昭和三（一九二八）年四月に、『夜明け前』執筆の準備のために馬籠村へ取材に出かけたこと、その年一夏かかって「大黒屋日記」から「抄記」を行ったこと、は知られている。

では藤村は、馬籠の大脇家（大黒屋）に「日記」が残されていることをいつ知ったのであろうか。この点について北小路健らは、藤村が馬籠へ取材に出かけた昭和三年四月に知ったものと見ている（『続木曽路文献の旅』）。北小路は、藤村が島崎家の隣家大脇家（大黒屋）に招かれたのが昭和三年四月二十七日の夜で、この時大黒屋の当主であっ

た大脇文平（信興のひ孫、一一代信常の孫）から初めて厖大な「年内諸事日記帳」が示された、としている。藤村は、文平の叔父で大脇家の分家・俵屋に養子入りした大脇鉄三郎とは幼馴染であった。ついでにいえば、この鉄三郎の妹が初恋にうたわれた少女「おゆう」さんである。藤村は、鉄三郎との旧交を温めながら、これから書こうとしている小説の構想に必要な馬籠のことを聞き出しているうちに、「年内諸事日記帳」という日記があることを明かされたということになる。北小路は、この時のことを次のように書いている。

「藤村は、中山道（木曽路）の一宿駅にかつて活きた父を描こうと構えていたが、生活のにおいのする文献に巡り会えずに苦しんでいた頃である。ほとんど唯一の資料は、八幡屋蜂谷家に保存されている日記・覚書の類であったが、主なる時代的舞台を、黒船来航の嘉永六年から主人公青山半蔵の死ぬ明治一九年までと一応設定していた藤村にとって、八幡屋文書は少し時代が古い。幼馴染の記憶のすみずみまでを叩いて、少しでも場と時と人に対する具体的な資料となるべきものを聞き出そうとしていた藤村にとって、この「大黒屋日記」との邂逅は、ドキンと胸にこたえるほどの驚きと喜びであったにちがいない。この日記なくしては、『夜明け前』の、あのような内容を持っての制作は不可能であった。」(10)

これに対して馬籠在住の人たちは、藤村は昭和三年以前に「大黒屋日記」を見ていたとみている。宮川平太は、藤村に「大黒屋日記」の存在を紹介した大脇文平から、藤村はすでに小説『嵐』執筆で馬籠に帰った時に「大黒屋日記」を見ている、といわれたと発言している。なお、伊東一夫も、「『夜明け前』を執筆される前に「大黒屋日記抄」をつくっておられますが、どうも私はその前に（多少）先生は見ておられたのではないかと思います。」と発言している。(11)

藤村は、前出「覚書」において、「大黒屋日記」について

「この隠居の一番日記は、文政九年、同じく一〇年、一一年の三ケ年の日記帳より成るものでそれをつけはじ

めたのは、三十歳の頃かと思はれる。さういふ日記帳が二七番までも文平君（大脇家当主）の家に仕舞ってあった。最初のうちは、わたしもあの隠居が二七番の日記を残したこととのみ思ってゐたが、そのうちに文平君からまだ四冊残ってゐたと言って送ってよこして呉れたのを見ると、実際は三一番まであって、隠居三〇歳の頃から七〇歳まで、年代から言へば文政九年から明治三年まで、およそ四十余年間に亘る街道生活の日記帳である。」[12]

と書いている。

たしかに、藤村が昭和三年四月に大脇文平に示されて目にしたのは、文政九年の一番から慶応三年の二八番までであった。この日記群は、もともと天保四、五（一八三三、三四）年と天保八、九（一八三七、三八）年の四年間が無く、この時は一八番（安政四年）と二六番（慶応元年）を欠き、その存在も定かではなかった。この時は、現物を見た二六冊を借用することとして、文平から藤村の下へは五月に入ってから送られたのであった。これを藤村は、一夏かかって抄記することになったのであった。なお藤村自身も書いているように、その後大脇家からは、二九番（慶応四年）から三一番（明治三年）までの三冊が見つかったとの連絡を受け、同様に藤村の下に送られている。しかし、この三冊分の抄記が同じように作られたかは判然としない。「大黒屋日記抄」は、二八番の慶応三（一八六七）年までしか残されていないのである。

「大黒屋日記」の史料群は、文政九年から明治三年までの四五年間のうち四一年分（上述のようにもともと四年分を欠く）、三一冊（合冊を含む）の構成である。そして島崎藤村が「抄記」を残したのは、「大黒屋日記」の二六冊分、つまり慶応三年までであり、二九、三〇、三一番の分は残されていない。そのため、「大黒屋日記抄」と『夜明け前』との関係は慶応三年までで終わっている。しかし藤村は、後述するように「抄記」を残さなかった明治初年について

も、小説『夜明け前』の記述には「大黒屋日記」の記事が生かされている。なお、藤村が見ることの出来なかった一八番、二六番の日記も出てきて、現在では「大黒屋日記」は四一年分三一冊全部が揃っている。

記録としての「大黒屋日記」、「大黒屋日記抄」、文学作品としての『夜明け前』、この三者の比較検討の必要性は、北小路健などによって唱えられていた。この点については、『藤村全集』第一五巻に「大黒屋日記抄」や関連する資料が所収されたことによって、比較検討の条件が一つクリヤーされた。「抄記」が活字化されて見ることが出来るということは研究を志すものにとって大きな福音となった。しかしながら、「大黒屋日記」そのものにまで立ち返った研究は、ほとんど進展してこなかったのである。現実には、「大黒屋日記抄」の出版が、「大黒屋日記」そのものの検討を研究者から遠ざけることになった。『藤村全集』第一五巻刊行が準備されていた頃から、馬籠の藤村記念館では小説のもととなった日記の閲覧希望にたいして、刊行予定の「大黒屋日記抄」を見てほしいとして、「大黒屋日記」の公開はなかなか実現しなかったのである。

ただ、昭和四三年以前の時点で、藤村記念館の資料管理が一時期緩和されていたことがあり、東京の大学の研究者が「年内諸事日記帳」全部をマイクロフィルムに撮影したり、コピーにして入手した例もある。北小路健は、そのマイクロ写真二千余枚を複写させてもらい、その解読にあたったという。[13] しかし、昭和五〇年（一九七五）に筆者がテレビの放映のための取材をした時には、ごく限られた必要な枚数の撮影しか許されず、「年内諸事日記帳」の採集とその解読はきわめて難しい状況になっていた。

さて、北小路は『夜明け前』と「大黒屋日記」との関連の検討には、つぎの三点が肝要であると述べた。

「まず第一に、藤村が『大黒屋日記抄』のノートを作るにあたって、『日記』のどこを採り、どこを捨てたか。第二に、一旦『日記抄』に書き抜いた記事のうち、更にどれを捨て、どれをどのように、構想・叙述・描写の

中に生かして用いたか。第三に、したがって、藤村の資料読みの態度（構え）は、どのようなものであったか、という三点である。[14]」

北小路は、「大黒屋日記」の原文を読み、読み進めながら「大黒屋日記抄」とも比較して検討し、その成果の一部を『木曽路文献の旅』[15]にまとめて刊行し、これが昭和四五年度毎日出版文化賞を受賞したのだが、全原文の詳細にわたる検討結果については、別稿を予告されながら、発表されないままになっている。

私は、北小路が設定した三点とは別に、「大黒屋日記」そのものに書きこまれている当時の村人の生活、つまり村落生活史の様相について直接的に把握したいと考えるものである。それは、四一年分全部を読破した上でなされる必要があるが、まず、ここではこの「大黒屋日記」は、これ自体が民衆の生活史、また村落生活に関する豊かな情報を提供してくれるものであることを指摘しておきたい。

註

(7) 島崎藤村の『夜明け前』は、『藤村全集』本を初めいろいろな形で出版されている。新潮文庫・岩波文庫ともに第一部・第二部とも上下に分冊され計四冊で入手できる。

(8) 所三男「大黒屋日記抄・解題」（『藤村全集』第一五巻、一九六八）

(9) 『藤村全集』第一三巻　一九六七

(10) 北小路健『続木曽路文献の旅』芸艸堂　一九七一

(11) 座談会「島崎藤村と『夜明け前』」（『有隣』第二一二号　一九八五）

(12) 『藤村全集』第一三巻　一九六七

(13) 北小路健『古文書の面白さ』新潮選書　一九八四

(14) 北小路健『続木曽路文献の旅』芸艸堂　一九七一

(15) 北小路健『木曽路文献の旅』芸艸堂　一九七〇